

有坂秀世『音韻論』の諸版本

吉池孝一

—

有坂秀世とはどのような人物であったか。『有坂秀世 言語学国語学 著述拾遺』（有坂愛彦・慶谷壽信編、三省堂、平成元年六月）の金田一春彦氏序文の冒頭に次のようにある。「家父・金田一京助は、生前、有坂秀世博士を評して、あれは百年にひとり生まれる言語学者だと推称していた。橋本進吉博士は、自分の後任東大国語学主任教授として、有坂博士に白羽の矢を立てたが、病弱の故をもって辞退され、口惜しがっていたと聞く。有坂博士は健康に恵まれず、生涯の半ばを病床で送られ、満四十三歳の若さで他界されたことは、いくら惜しんでも惜しみたりない」。これによって人物の一端を知ることができる。その有坂氏には名著『音韻論』（三省堂）があった。昭和15年に初版が発行され、その後版を重ねた。いま手元にある諸版をみると次のようである。

- ①『音韻論』昭和15年12月15日発行。印刷者：三省堂蒲田工場。
- ②『音韻論』昭和17年1月15日再版発行。印刷者：三省堂蒲田工場。
- ③『音韻論』昭和18年12月10日三版発行。印刷者：三省堂蒲田工場。
- ④『音韻論』昭和22年9月30日初版発行。印刷者：清和印刷株式会社。
- ⑤『音韻論 増補版』昭和34年5月5日初版発行。印刷者：萩原印刷所。
- ⑥『音韻論 増補版』昭和44年9月20日4版発行。印刷者：不記。
- ⑦（復刻版）『音韻論 増補版』1992年11月25日復刊第1刷発行。印刷者：不記。

慶谷壽信氏の「有坂秀世博士略年譜稿」（以下「年譜」と略称）によると¹、昭和16年7月8日に学位請求論文『音韻論』（三省堂刊）と参考論文「アクセントの型の本質について」（言語研究第七・八号）抜刷とを東京帝国大学に提出し、昭和18年2月24日に東京帝国大学文学部教授会で学位請求論文がパスしたという。この経緯を反映し、①初版と②再版の中扉は「音韻論 有坂秀世著」であるが、③三版では「音韻論 文学博士 有坂秀世著」となる。

昭和20年8月14日に終戦をむかえ、その二年後に④が発行された。④の表紙は

¹ 有坂愛彦・慶谷壽信編 1989の368-379頁「有坂秀世博士略年譜稿」による。

白色系のソフトカバーによる装丁となっている。他の版本は全てハードカバー（もっとも三版はやや薄目）であるから、ずいぶん趣を異にする。④に「初版発行」とあるように、戦争により三版までの紙型（シケイ）が失われ、印刷者は三省堂蒲田工場から清和印刷となり、版を新たに組みなおした。そのため、残念ながら④戦後初版（以後、戦後初版と称する）には大量の誤植が生ずることとなった。そのあたりの事情は⑤増補版のあとがきに詳しい。

二

⑤増補版には次のような「刊行委員あとがき」がある。

本書『音韻論』は、昭和 15 年に初版が発行された。以来、今回をもって、正確には、五版をかぞえるはずである。初版時における紙型は、すでになく、本書は、第四版の紙型によっている。第四版は、敗戦後まもない昭和 22 年に発行された。それだけに、かなりの誤植がみいだされるが、今回は、書肆の事情もあって、あらたに、くみなおすことはせず、象嵌をもって、できるかぎりの訂正をほどこすにとどめた。

ここでいう「第四版」とは先の④戦後初版のことである。「象嵌をもって、できるかぎりの訂正をほどこすにとどめた。」とは次のようなことである。④「e は ə と ɾ との中間音」（1 頁 24 行）を⑤「ə は ɾ と e との中間音」に改めるなど。しかしながら、なお訂正の必要な箇所を残したまま⑤増補版は発行された。その後、⑤増補版に基づき⑦復刻版が発行され、『音韻論』の最新本として我々の前に現れた。

いま①初版②再版③三版の何れかが正しく、⑦復刻版で誤植が生じているものをあげると次のとおりである。矢印の左は第三版までに見られる正しいかたちで、矢印の右は⑦復刻版の誤植である。すなわち○正→×誤。頁数および行数は⑦復刻版による。なお句読点の位置の異同や括弧の有無など形式的な誤植もおろそかにできないことは勿論であるが、多数に上るためここでは挙げないこととする。

③第三版まで

⑦復刻版

○観察しようとする。→ ×観察しようする。（10 頁 21 行）

○引出さしめ得る。→ ×引出せしめ得る。（11 頁 22 行）

○範圍→ ×範圍（18 頁 9 行）

○移り行いて→ ×移り行つて（55 頁 18 行）

○dz, z の差異→ ×d, dz の差異（57 頁 26 行）²

○相互に→ ×相互の（60 頁 18 行）

² ①②③○「dz, z の差異」→④⑤⑥⑦×「d, dz の差異」。典型的な誤植のパターン。

- Part I → ×vol. I (72 頁 33 行)
- št'inā の場合 → ×št'inā の場合 (87 頁 15 行) *ā の上に・を付す
- štòl → ×štòl (88 頁 11 行)
- 所謂 Bühnenaussprache → ×所謂 Bühneraussprache (91 頁 20 行) ³
- (註 23) → ×(註 22) (111 頁 17 行)
- 構造に関する法則 → ×構造する法則 (112 頁 1 行)
- de|s a|mis → ×de|s a|mi (117 頁 16 行) ⁴
- Proklisis → ×Enklisis (118 頁 1 行)
- といふ型は → ×といふ型が (126 頁 3 行)
- boca → ×boka (148 頁 36 行)
- ワタツミ → ×ワタミツ (175 頁 3 行)
- ピッチ → ×ビッチ (216 頁 16 行)
- 〔c〕 → ×〔っ〕 (235 頁 21 行)
- ua → ×au (242 頁 8 行)
- 第二の形態論的要素 → ×第二の形態的要素 (255 頁 12 行)
- dulevo → ×dulevo (257 頁 9 行) ⁵
- changements → ×cangements (259 頁 21-22 行)
- Langage → ×Language (259 頁 23 行)
- 老子・莊子 → ×孔子・老子 (264 頁 11-12 行) ⁶
- herausgegeben → ×herausgeben (264 頁 24 行)
- その語自體 → ×その語自体 (266 頁 18 行)
- 明るい → ×明い (268 頁 26 行)
- 母音同化現象 → ×子音同化現象 (301 頁 15 行)
- 明晰 → ×明{日折} (310 頁 13 行)
- phonétique → ×Phonétique (310 頁 39 行)

³ ①②③④○「Bühnenaussprache」→⑤⑥⑦×「Bühneraussprache」。

⁴ ①②×「de|s a|mi」→③④○「de|s a|mis」→⑤⑥⑦×「de|s a|mi」。des により複数形であることがわかるから③④の amis が正しい。⑤増補版は、④戦後初版の紙型によりその誤植を正して刊行したわけであるが、これは旧版①②の誤に復した例である。なお注 5 の誤植も本例と相通ずるところがある。

⁵ ①×「dulevo」→②③④○「dulevo」→⑤⑥⑦×「dulevo」。

⁶ ①②×「孔子・老子」→③○「老子・莊子」→④⑤⑥⑦×「孔子・老子」(264 頁 11-12 行)。このパターンは他に例がない。便宜としてそれぞれに×と○を付したが、①②を誤記、④⑤⑥⑦を誤記に復したものと見ることは慎重であらねばならないと考えている。この点については注 8 を参照されたい。

○音聲 → ×言聲 (327 頁 22 行)

○理想としては → ×理想として (331 頁 21 行)

三

版を重ねるにしたがい、初期の誤植や誤記などは徐々に訂正されていくであろうとふつうは期待する。『音韻論』も、①初版、②再版、③三版と、第三版までは同一の紙型により誤植や誤記などが訂正されていく⁷。その際、再版を含め三版までは有坂氏自ら訂正の指示を出し部分のあることは、著者でなければ為し得ない訂正が見られることよりそれとわかる⁸。

しかし、版を組みなおした④戦後初版において、新たな、しかも多量の誤植が生み出された。初期の正しい形が後に誤られ、そちらの方が普及するということは屢々あるが、それは著者のあずかり知らぬ事である。今、④戦後初版（昭和 22 年 9 月発行）が発行された昭和 22 年前後の有坂氏の状況を、先の「年譜」によってみると次のようである。

昭和 20 年 2 月初「肋膜炎の古傷が痛み出す。」、同年 4 月 1 日「強制疎開により世田谷区三軒茶屋町八六に転居。病状思わしからず。」、昭和 25 年 1 月「危篤の状態が一ヶ月余つづく。」とある。この間、あるいは仕事のできる状況ではなかったかもしれず、昭和 27 年 3 月に満四十三歳をもってその短い生涯を閉じることとなった。組み直された部分の校正は旧版とつぎ合わせれば事足りるわけであるから、有坂氏の手を煩わせるまでもないことであるが、たとえそのような作業があったとしても、

⁷ ①×「単位でである」→②③○「単位である」(97 頁 7 行)。

①②×「Enklisis」→③○「Proklisis」(118 頁 1 行) など。

なお、訂正が必要となる箇所は様々である。原稿に記された誤記であったのか、植字の段階での誤植であったのか、誤記でも誤植でもなく、著者の意をもって適切な表現に変更したものか、厳密には元の原稿および本人の校正記録と付き合わせなければ分からない。もっとも、誤植誤記と変更の両者は比較的容易に区別することができる場合がある。また、版を組み替えて生じた誤は、旧版と見比べることにより、誤植であることが分かる。著者の死後、編集者の意をもって変更された部分に誤りが生じる場合もある。

⁸ 注 6 で言及した①②「孔子・老子」から③「老子・莊子」への訂正は、単純な誤植の訂正でもなければ誤記の訂正でもない。文脈から見て「孔子・老子」で問題はないが、「子」が軽読されるか否かにより一般名詞と固有名詞の二義が生じる例として、「孔子・老子」の内「孔子」を廃し「莊子」を採用したのであろう。このような適例への変更は、著者にはじめて為し得るもので、たとえそれと分かっていたにしても他人が勝手にできるものではない。なお、④で「孔子・老子」の旧に復するわけであるが、これも単純な誤ではなく、そこには有坂氏の意志が働いたと考えたい。④では多くの誤植が生じたけれど、訂正と見ることでできる箇所も少なくない。その訂正の一部が有坂氏の指示によるものであるということについては注 10 を参照されたい。

なお、有坂愛彦・慶谷壽信編 1989 の 279-296 頁「『有坂秀吉氏音韻論手簡』について」に「有坂氏の学位論文は、上野の国立国会図書館分館に参考論文とともに保管されている。この『音韻論』中には、ところどころミス・プリントの訂正がみられるが、」(281 頁) とあるが未見である。

当時の有坂氏の病状はそれを許さなかったであろうことは想像できる⁹。もっとも、③三版までの紙型に基づき有坂氏自身が訂正を指示したと思しき部分もみえるが¹⁰、新たに組み直した部分の多量の誤植については手が付けられないまま上梓された。

四

この④戦後初版の紙型に基づいて⑤増補版以降ができた。⑤増補版によって、④戦後初版で生じた誤植が正され、さらには①から④までの誤植誤記などが新たに正された部分もあるけれど¹¹、④戦後初版で生じた誤植を受け継いだ部分及び⑤増補版で発生した新たな誤もけっして少なくはない。具体例の一部は先に挙げたとおりである。

以上によって思うに、誤植は印刷物の宿命とも言えるもので③三版もそれを免れることはできなかったけれど¹²、これまでに出版された諸版本を見るかぎり、一部分に問題はあるとはいえ¹³、第三版が最も完成されたかたちの有坂秀世著『音韻論』であると言ってよいのであろう。

〈参考文献〉

慶谷壽信 1984.「有坂秀世研究のために一療養生活その他一」,『人文学報』166:1-44 頁。

有坂愛彦・慶谷壽信編 1989.『有坂秀世 言語学国語学 著述拾遺』,東京:三省堂。

⁹ 慶谷壽信 1984 は、金田一京助氏に宛てた昭和 22 年 4 月の葉書を紹介する。その自宅療養の状況を記した部分には「この頃は毎日五分間位づゝ濡縁へ出て、庭を見おろし、春風に吹かれながらお花見をするのを楽しみに致して居ります、回復の日も定めし遠くはないこととごぞいませう」とある。これは、慶谷氏の言うように「四月の中ごろに、一日五分間しか風に吹かれることができない。病状は相当に悪い、と考えてよいであろう。」(38 頁)ということであろう。

¹⁰ ①②③に「もはや單なる結合的 (fusional) なものではなくて、象徴的 (symbolic) 且結合的なものとなつたのである。」とある。これは E.Sapir による著書の訳文ある。この二箇所「結合的」を、④は「融合的」(148 頁 5-6 行)とし、⑤⑥⑦もそれを引き継いだ。これは古代英語で *tothi* の *o* が後続の *i* に同化され *töthi* となったことを述べた箇所であり、この同化を称して *fusional* と表現した部分がある。その訳語として最初「結合的」としたところを、④で「融合的」に訂正した。これは単純な誤植の訂正ではなく、より適した訳語への変更である。このような変更は、著者にしてはじめて為し得るもので、たとえそれと分かっていたにしても他人が勝手にできるものではない。

¹¹ ①②③④×「口蓋音 (t,d,n)」→⑤⑥⑦○「口蓋音 (t,d,n)」(81 頁 16 行)。
これは *n* の口蓋化が明示されていないところ、訂正を加えて明示したものである。

¹² 注 11 のパターン以外に、以下のようなものもある。

①②③④⑤⑥⑦×「*Origin*」→○「*Origin*」(264 頁 26 行)。これは明らかな誤植であるが、その他に内容に係わるもので、誤植とも誤記ともつかないものもあり検討を要する。

¹³ ③三版の末尾に付された「内容概観」には誤植が極めて多い。これには理由がある。どうしたことか、①初版に有った「内容概観」が、②再版本には無いのである。それで、③三版発刊時に、「内容概観」のみ、新たに版を組みなおした。何れかの段階で①初版以来の「内容概観」部分の紙型が失われたわけである。結果は、誤植だらけのまま上梓されてしまった。有坂氏にとっては思いもよらぬことであろう。